

第20回国際ガラス会議の開催への道

XX ICG 組織委員会委員長

大田 陸夫

Midway to the 20th International Congress on Glass

Rikuo Ota

Congress Organizing Committee

1974年7月7～12日、第10回国際ガラス会議が京都国際会館で開かれた。それから、ちょうど30年、今年2004年9月26日から1週間第20回国際ガラス会議が同じ京都国際会館で開かれる。手元に当時の運営説明書（事務局発行）がある。手書きで、B5版19枚、38ページにびっしり書き込まれている。多くのなつかしい名前があらわれる。30年間の通信・印刷技術は、すっかり進歩した。たとえば、手紙で往復2週間かかったものが、e-メールで数時間。原稿や図表をインターネットで即座に送れる。当時はワープロもなかった。CDもなく、タイプライターで秘書が打つ以外になく、間違えば、はじめから打ち直さなければならなかった。連絡や編集などにも莫大の手間がかかった。当時は会議業務委託会社などはなかったの、多くの人々の手を煩わすしか方法がなかった。時代は変わり、利器は増えたが、現代は大学も企業も人手不足であり、外部への業務委託を行わざるをえないことになった。このように大がかりな国際ガラス会議を2度目に日本で開催することが正式に決まったのは、1999年1月であるが、曾我直弘先生が国際ガラス委員

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町
TEL 075-724-7565
FAX 075-724-7580
E-mail: ota@chem.kit.ac.jp

会の会長(President)であった、1994-1997年のあいだに内定していたはずである。日本は1953年の第3回ベニス大会に初参加以来、1974年第10回京都大会を含めて、2001年第19回エディンバラ大会までに参加した人数は、2000名以上に達すると推定される。多くの人人の参加によって我が国は有形無形の利を得たはずであるが、利を得るばかりが本意ではあるまい。国際ガラス委員会において相応の役割を果たしてきたことは確かであるが、ガラス会議の主権をもって外国にお返しをすることも忘れてはならない。もちろん、国際ガラス会議を誘致すること自体が、わが国のガラス産業とガラス研究者の存在を内外に大きく示すことでもある。

異文化は受け入れがたいものである。日本文化は大きく変化したといえ、世界文明(普遍性)とは異なる文化(ローカルなルールや様式、民族性)をもっている。日本の文化に接してもらえば外国人との交渉がしやすくなる。また、オリジナルな研究は大抵学会での口頭発表でもって始まる。いきなり、原著論文ではわかりにくいばかりでなく、聴衆との相互作用を通じてオリジナリティーは磨かれるものであろう。

ともかく、第20回京都大会の組織委員長として大会の準備をすすめてきて、ようやく全容

が見え始めてきたが、日が近づくにつれてますます多くの仕事わいてくるように見える。あとに若手がひかえているので、大丈夫だとたかをくくっているが、ここ3年ほど国際ガラス委員会などへの出席をサポートされてきたので、私にとって面白かったお話をいくつか報告してお礼としたい。

① 2001年7月1～6日。第19回 ICG エディンバラ大会（スコットランド）。アムステルダムでエディンバラ行き的小型機に乗り換えたら、隣はロシアの Mazurin 教授であった。エディンバラは2度目で、むかし、共産党時代若手の学者の会があったとき訪問を許されて以来とのこと。京都大会は旅費がないので行けそうもない。1987年、Sixth International Conference on the Physics of Non-Crystalline Solid に招待されて滞在した京都の日本人の親切が忘れられないとなつかしそうであった。第11回 プラハ大会（1977）では故功刀先生が出席して私のオリジナル論文を発表されたが、そのとき以来の私のサポーターである Mazurin 氏には親しみとともに恩義すら感じる。

② 2002年1月24～29日。パリ。委員会。委員会の開始が朝9時からなので、8時にホテルを出たら外は真っ暗。時間を間違えたのかと思ったが、そうではない。いままでヨーロッパ行きはいつも夏だったので、はじめて冬のヨーロッパの夜を知った。パリ市街を縦横にあるきまわった。マリーアントワネットの幽閉された部屋をみた。ひどく小さいベッドだった。昔のフランス人は背が小さかったそうである。

③ 2002年6月1～8日。モンペリエ（フランス）。ICG 年会。主催者 Vacher 教授がオーケストラの指揮をとった。スーツの背中が汗で光った。わたしも負けてはおれない。京都大会では弦楽4重奏で対抗する、と Vacher 氏にメールを打った。閉会式では京都大会の予告として「金閣寺」を映したら女性の多い観客からカメラのシャッター音が続いた。いいものはいいのだ。自信を深めた。オブショナルツアーに

乗ったら、男2人、女4人のグループであった。みんな外人であった。京都大会のプレジデントだと言ったら大いにもてた。

④ 2003年2月13～17日。クラコフ（ポーランド）。委員会。冬のポーランドは交通が心配であった。持つべきは友人。1977年 UCLA 時代のポーランドの友人、ムラオスキー教授がグダンスク大学から出迎えてくれた。大戦で消失したが、戦後寸分通り復元したワルシャワ市街を案内してくれた。深夜だったが金曜日で人出は多かった。クラコフでの委員会のあとの夕食会はユダヤ人レストラン “Jewish Restaurant” であった。夜は更けて、音楽が鳴り、外は雪が降り始めた。こんな夜は一生忘れないよという、事務長 Nicoletti 氏の眼がうるんだ。路面電車に乗るとドイツの Schaeffer 会長がクラコフは大戦前はドイツ領だったと私にささやいた。同じ電車の中で、レディーファーストに気づいて席を立とうとする私の肩を Schaeffer 会長と Pye 元会長が押さえて、言った。座ってなさい、あなたは Kyoto Congress の President、我々 ICG President 2人の命令をききなさいと。

⑤ 2003年9月20～27日。カンボドヨルダン（ブラジル）。ICG 年会。委員会の席上、Pye 教授がにやにやしながら見せてくれた。アメリカのある学会のチラシだが、京都大会 XX ICG のロゴを連想させた。アメリカでニセモノがでたのだ。自慢していいのではないか。バンケットの席上、Kyoto Congress President として、一言あいさつを頼まれた。一言いうたびに拍手と口笛が鳴った。どうしたことだ。地球の裏側からたったの24時間で来た。時差はわずか12時間。時計を変えなくてよいよ。ムーチョムーチョアプリガード。日本語でいうとドウモドウモアリガトウ。似ているでしょう？ ワー、キヤー。ピーピー。私は何をしゃべったのか覚えがない。サンバでお迎えしてくれたのなら、Kyoto Dance でお返しするよ。Kyoto へいらっしゃい。気がつく、おおきに！と日本語で

叫んでいた。ブラジルの日本熱はすごい。しかしブラジル人以外からもあのスピーチよかったといわれたから、ひょっとしてホンモノだったのか？

⑥ 2004年2月26～3月1日。リスボン(ポルトガル)。委員会。この日ポルトガルが国際ガラス委員会のメンバーになった。代表者はRui Almeida教授。1977年UCLAで大学院の学生だった。学生結婚していて、夏休みには故郷に帰っていた。なんと裕福なとやらやんだ

り、のんびりなことだと思ったりしたが、それがリスボンだったのだ。短い滞在だったので、長びいた委員会の途中で退席して、予約した市内観光バスに文字通り息を切らして駆けつけたが、帰国後、議題になっていた曾我先生のPresident賞決定のうれしいニュースが私を追いかけた。

Saint Gobain社のリスボン工場を見学させてもらった。海外の工場見学は初めてだった。